



妙見  
威右

清正真傳記

初篇  
五上



~ 13  
3333  
5



門へ18  
號 3333  
卷 5

松平正真傳記初篇卷之五上目錄

運後園籠名帝城城大樹條

得業水田系於道湖條

義服御子天漢印勅應之事

明智先秀拜謁新治軍之事

義服御子天漢印勅應之事

英雄相拒事

遠夏春基欲刺信長事

信長上洛路次合戰之事

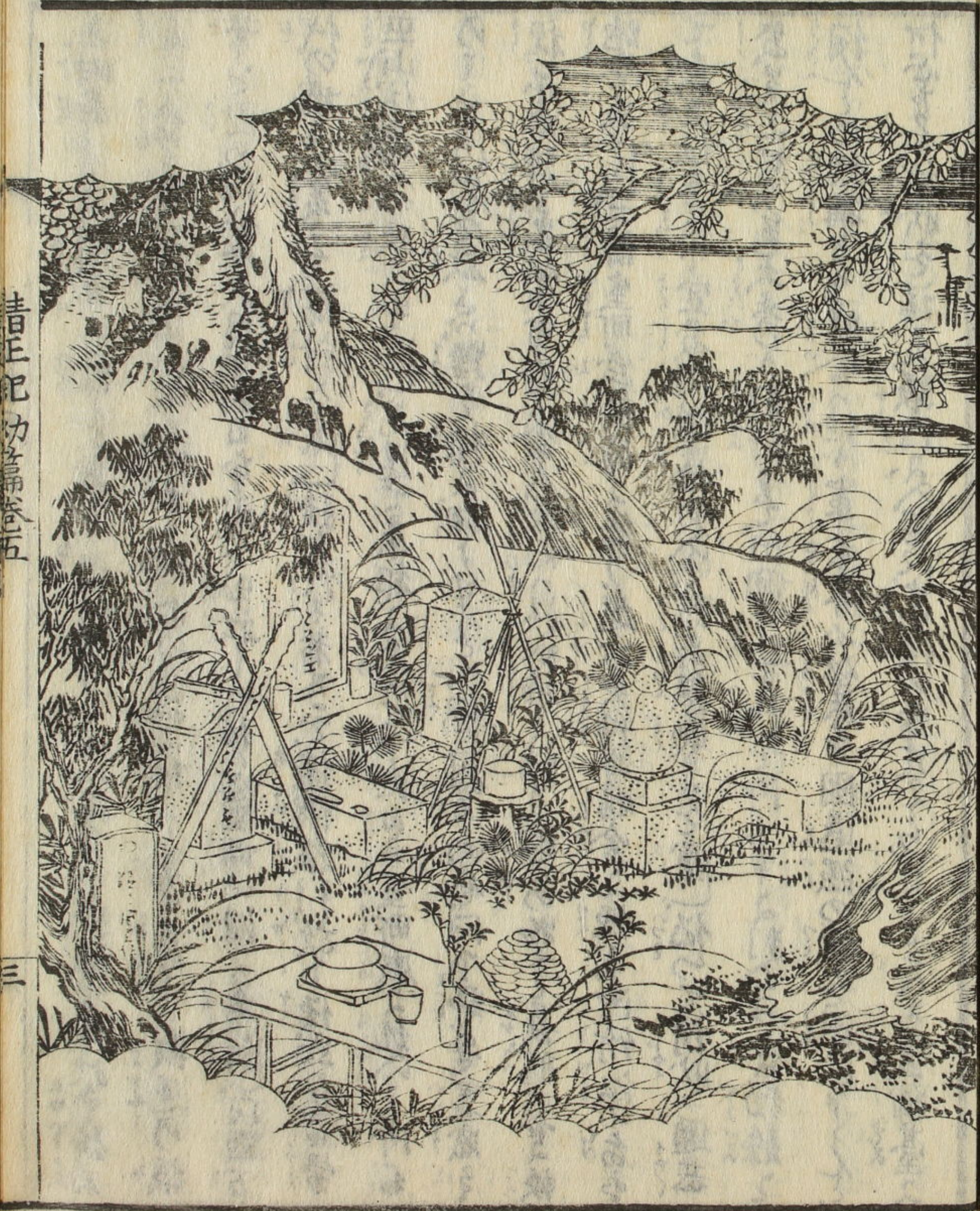
日國目錄

大正十年八月廿九日  
本大學出版部  
贈



其実名を法名にすべし長慶と号し又松永輝正忠之弟と云者あり其種  
 姓を尋らば攝州碓氷郡八百屋山に生じて後又碓氷に徙り其父長慶  
 ありし時其幼年の時公卿等々人々勝と云民を擧果る事を厭ひ一度其名を  
 天に知れしと人物をとり同國神峯山の毘沙門天に祈願せしところ屬系朝して  
 政を傾けたる或時彼石に宿降るる小川窪と云所を時夜續松の火消し  
 ありし飢饉と雖も胸の奥より絶くたる小松の五三むらりたりし村里行  
 不たありたりし憫然として遙く顧る小山陰に當りて焼火以て人々を  
 てたれ膏の種を人々を尊きたる化理れ細く互界をよそある松永と  
 見く万物天地の間に生じて死何れはともすは死後其穢惡を去りて  
 嫌へば小ありはと於て明松の火を付明日の正月元日ありしと免て後一筆  
 の食を以て終りたるの供物其外不ありのを収め歸りて新年の夜に  
 のくると是を追日月を迎て蒙り其後三好家に仕へ次第に昇進し執

事あり長慶老後より其に代りて政を治るる地を以て大和國の門  
 の城を以てし長慶が嫡男流義長と名し不和ありて竊に我が  
 招きし惣統毒を用ひ害世を知り人々より其長慶嗣子なきに依て舍  
 才十河民部をま一ねが男花系を義次と名し其年齢未幼きより一族  
 三好日向守長縁月下野守政康岩成を親父花通を以て後見し世に三好の  
 三人衆と云永禄七年七月長慶病死せしより三人衆松永と云義次を依はれ  
 將軍家の相傳衆と稱され其後僅に十六歳政務を悉く之を三人衆の心にて  
 長慶が世に在りし時公卿等々は其威を畏るる將軍を授けし如く其阿波の  
 不義業と云り以て堀尾若義維の嫡男將軍の所ありし後兄若義阿波國  
 人々を以てする阿波の所不義と稱せり長慶在世の時公卿等々は其  
 計りし其懐を遂じて死し今附務りせりて三人衆松永を以て  
 胸中懐きし公卿等々は其懐を遂じて死し今附務りせりて三人衆松永を以て



清正巴力翁堂五

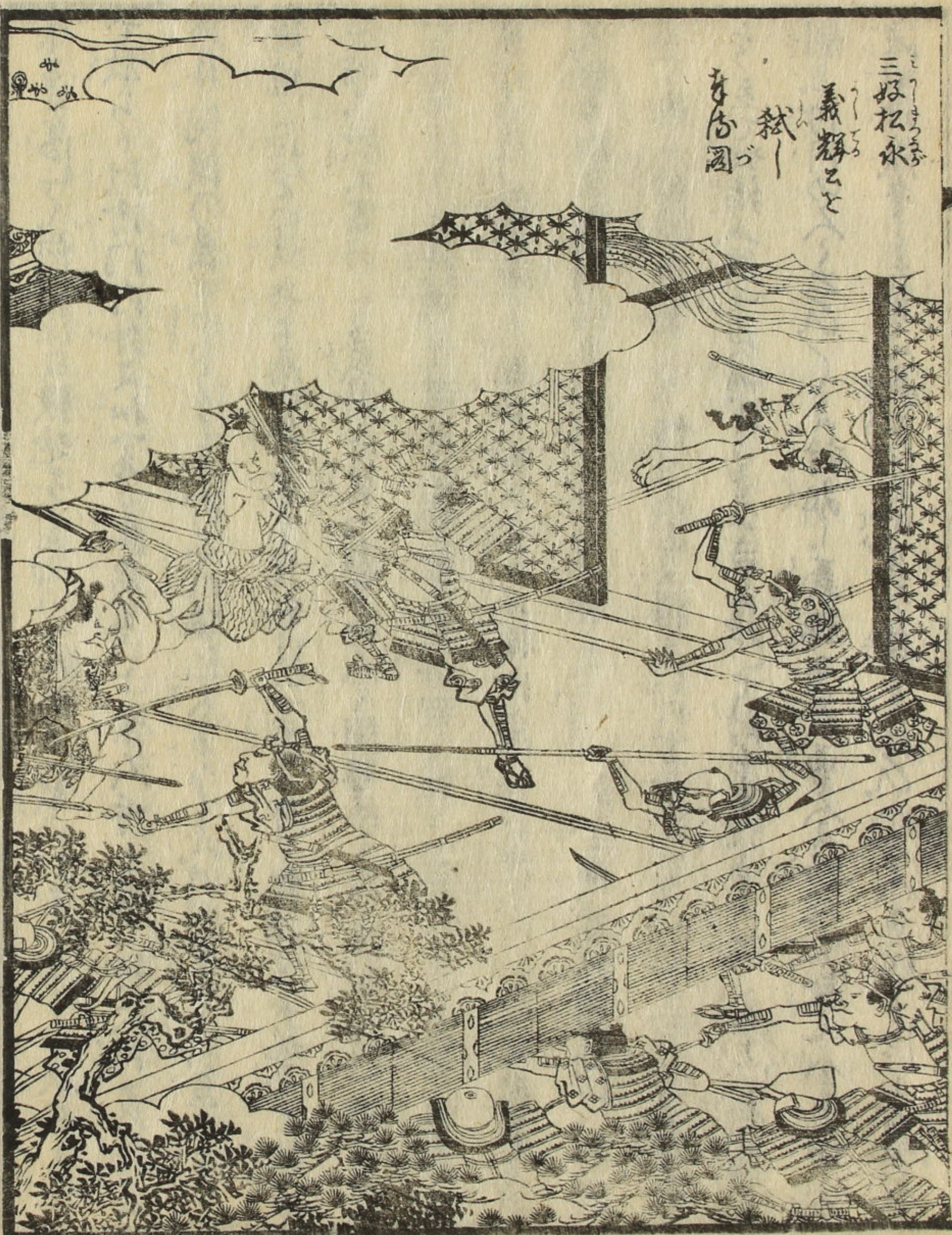
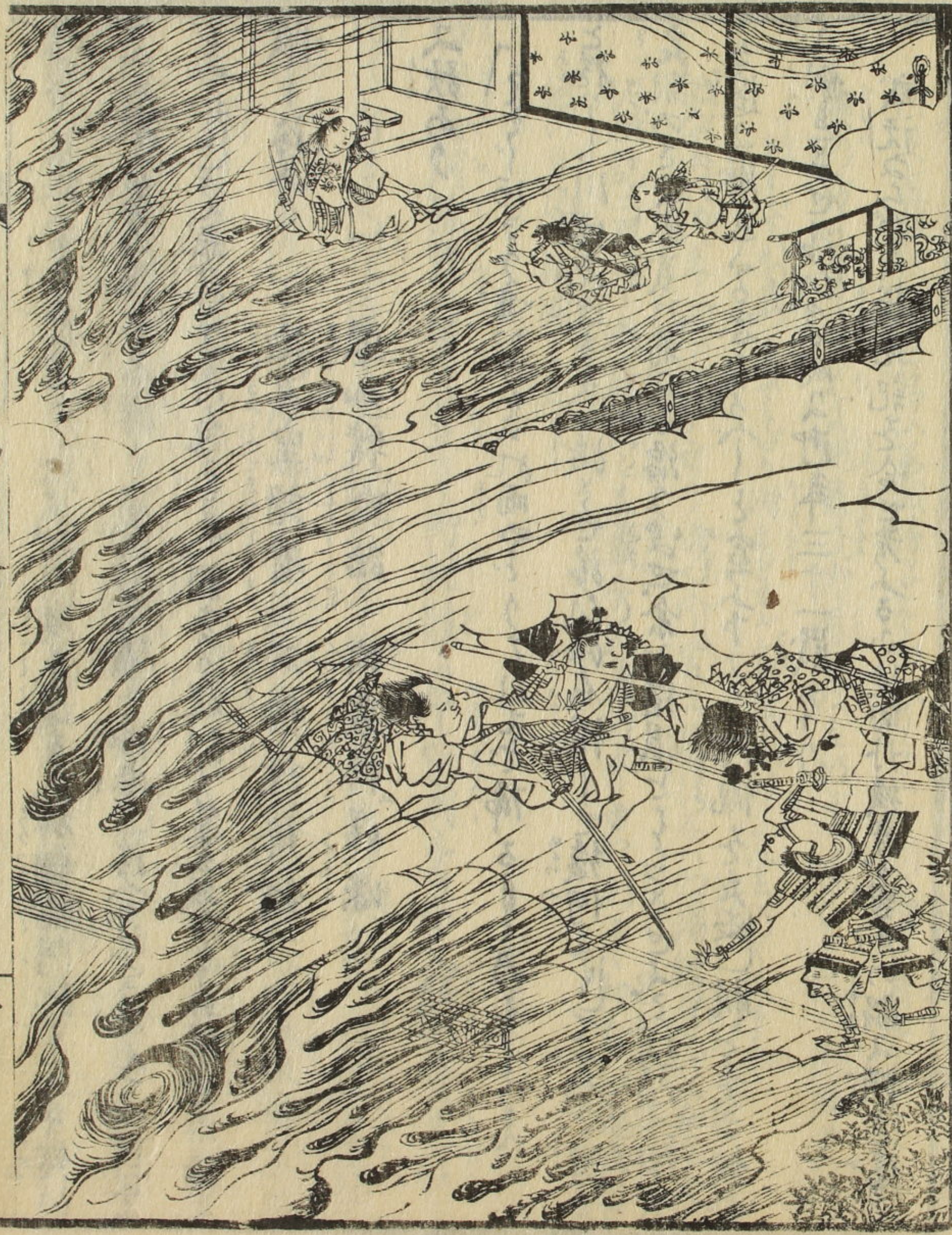


松永輝正  
蘇火を以  
て松明と  
す  
因會  
國

清正巴力翁堂五

是時節よく被軍を除んと思し候行とくは一獲へ、永藤七年此を御不  
直を承りて、三人衆も松永り阿波の三好、備中居て先く、叛逆の根  
華と固め、同八年八月十日日本國を以て、和歌山國堺の津より、岸、日國万  
代の城に入、謀計を以て、獲たり者、たを、徳儀、後引、故下、僧、或馬口、常  
巫山、伏、高人の、故、み、せ、先達て、京都、思、せ、十九日、室町、殿、入、御石  
の、より、火を、放、煙を、信、押、せ、と、板、三、好、日向、守、日下、野、守、岩、藏、を  
脱、松、永、彈、下、百、六十、余人、表、向、信、水、流、と、偽、射、の、物、と、長、樵、二、會、後  
砲を、え、く、三、條、室、町、武、衛、陣、を、来、り、進、士、兵、他、守、信、舎、を、偽、り、河、竹、松、の、向、を  
て、来、上、仕、る、足、下、室、町、御、落、入、り、居、居、懇、懇、を、遣、り、偽、り、河、竹、松、一、通、基  
を、上、せ、り、是、久、秀、が、計、計、と、け、回、己、が、兵、を、河、竹、中、入、り、二、三、の、動、静、と  
伺、伺、の、結、捕、り、り、晴、舎、の、地、が、軍、去、年、の、來、本、國、退、還、の、衆、を、謝、り、と、  
何、心、なく、所、状、を、信、を、張、内、へ、入、り、來、校、の、者、た、ら、く、と、座、を、立、補、其、堂、と

下ると、密しく、竹の隙に、鉄砲を、え、射、り、入、り、丸、丸、散、の、た、ど、く、殿、中、を、燒  
で、放、り、り、け、河、内、外、に、相、へ、る、傷、者、百、六十、余人、呼、と、嘯、て、切、て、入、り、河、竹、高、橋、  
の、外、河、候、の、武、士、お、り、り、り、河、竹、の、境、丸、大、方、り、け、河、竹、中、候、後、り、を、と  
號、信、に、右、の、伏、兵、去、居、の、筈、を、指、物、に、一、音、を、押、せ、諸、方、が、丸、不、て、後、食  
を、焼、り、敵、大、軍、の、一、は、武、具、を、信、の、殿、中、の、人、々、微、勢、の、と、り、河、竹、中、候、あり、車  
一人、も、た、り、一、は、河、竹、守、有、河、原、治、郎、と、野、兵、部、お、彌、多、傳、守、長、部、權、兵、衛、  
武、田、左、衛、門、佐、兵、衛、兵、庫、助、細、川、宮、内、お、彌、河、竹、屋、後、り、富、山、丸、即、他、大、銀、岩、を、代  
丸、朝、日、新、三、郎、撰、持、系、を、代、丸、河、道、朋、を、後、阿、弥、輪、阿、弥、松、阿、弥、竹、阿、弥、  
三十、余、人、各、務、の、裏、と、り、惟、子、の、と、り、釋、け、に、方、を、り、り、八、面、を、か、り、て、河、竹、  
を、立、て、切、橋、を、進、士、兵、他、守、の、中、に、入、り、計、ら、せ、り、中、候、と、云、上、河、竹、切、  
河、竹、内、の、人、々、を、討、死、し、義、輝、を、武、勇、を、擧、げ、り、敵、丸、今、を、切、信、  
池、田、丹、後、守、と、云、若、く、長、刀、を、河、竹、を、薙、り、後、り、今、の、人、々、を、り、と、奥、殿



三好松永  
義輝と  
戦  
る  
事  
也

煙の中に入生宮せんとし、於川増丸近き輝網輪阿弥なるに於て、  
大樹の影持院より系禪し、其の道機を琢磨し、於て死に臨んで心地を  
どやちと云ふ泰然たる御氣を以て、側を引よせ、云々を云、辭世の諸と  
賦し終る

抛刀空諸有 又何説鋒銘  
要知轉身路 火裏得清涼

又歌あり

「いそいで何まう唯わりのそれ雨やどりをしてを降る月とのもともえ  
と抱く川増丸近きまは後をせ終ひ汝に端して後何よして爰を道と  
炎期の上と忠義に於ては治りて世余が恨眼をとらせよ、これ死に殉ふ  
と遙く勝とる忠ちうとて空ふ下り御佩を衣に」腕と雲に俯合  
と例とせ終ひる、於て御年三十一歳なり  
或説らば、摺見記を合せ考ふるに、他回丹後守が男戸の服と云ふ

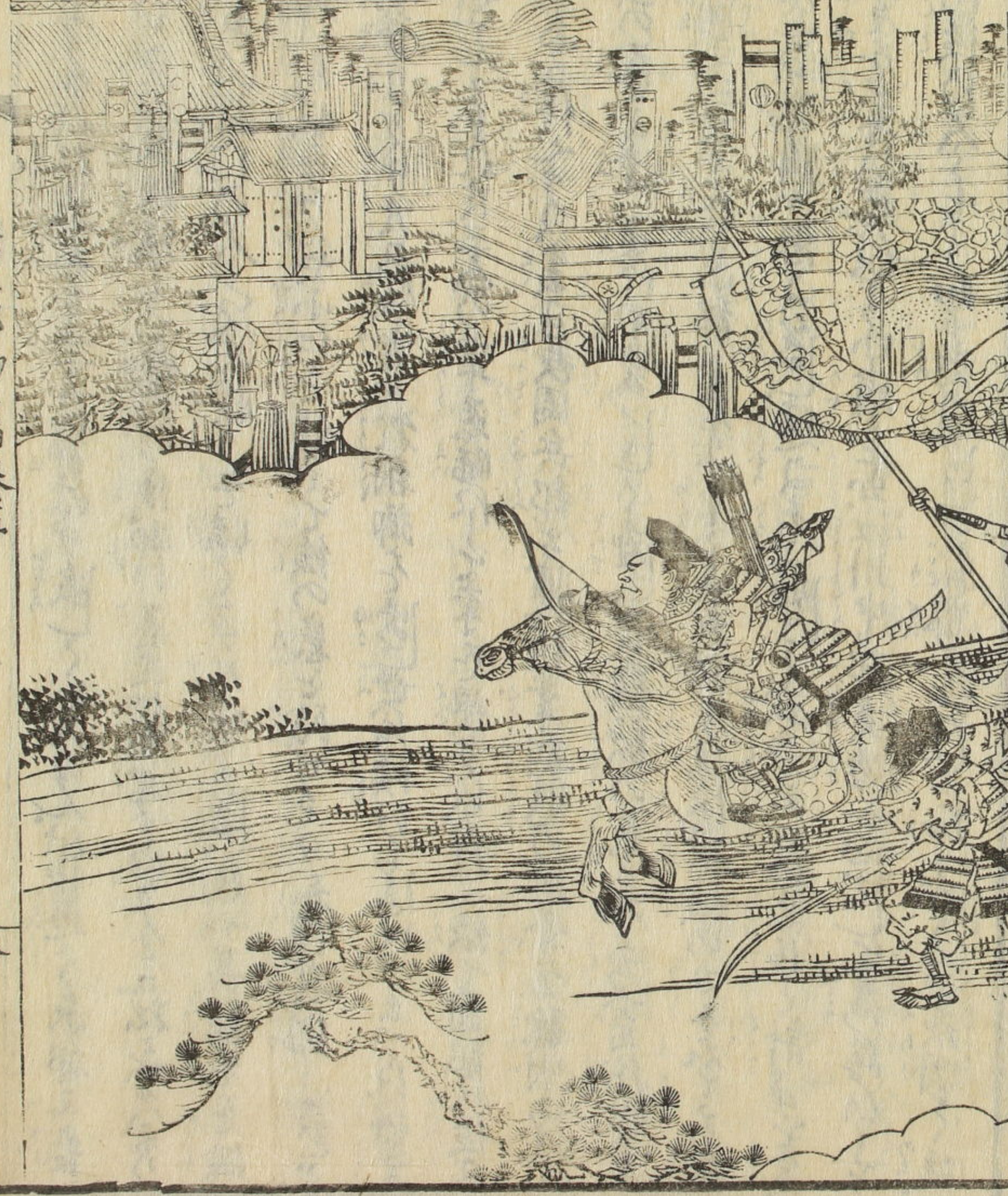
御是と羅伏例と終る不取、後ををておしふせ利きり、首をえんとし、  
奥の方より穿き入り、燃来り、御着と成れ、以てうきとて、此の御禱世の歌  
と云ふ、これ御年三十歳とせり、此之今爰に著る、不の湯被日記と稱し、  
以て記二百三十巻源佐と本義秀、其日記之今世に於て、印中江源武繼  
彼の日記の疎闕と云ふ

輝網輪阿弥煙の中に入生、御死骸を焼付を見、歎へまはる、骸と  
犯し、なるて、叶ふは、とて、お入死、火中と居り、其後御炎期のあ伏、系院の  
御門に、若きりしとて、や、慶壽院殿、近衛殿下、其娘君、おれ、凶後、後難とや、思  
と、人、助け、身れと、殿中と、搦し、求む、小御母、云、いと、や、八人の、女房、遣と、な、幼女  
中、は、飛入、又、終ひ、御、其、盛、盛、本、を、成、三、段、目、向、身、計、い、て、思、方、く、近、衛、殿、下、の  
御、禱、一、送、り、な、り、き、鳴、乎、今、日、い、う、た、る、日、ぞ、や、ま、る、或、御、征、夷、の、大、任、を、知、り

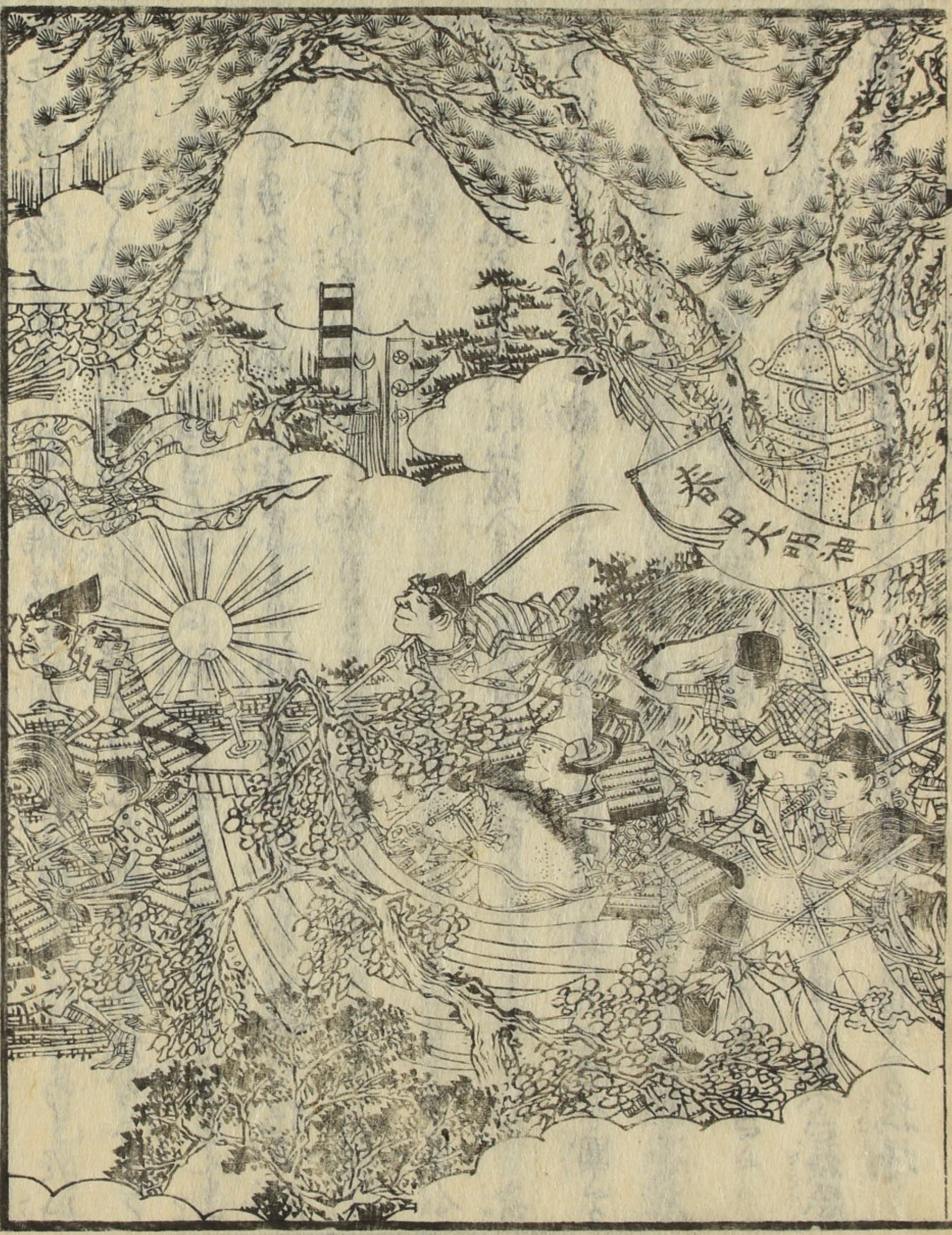




春日  
の  
新  
光  
得  
業  
又  
か  
と  
池  
張  
る  
園



吉原巴力道場



春日大馬

又佐らるれば松蔵多し坐は後世の事也とやあるにけし建退く京都又若  
く小ぞ三人衆降後して秋門の後助け是れ何ぞ怒るに其人云松永之秀  
拒り争ひ釋門の今より大勝りを懐くや凡信又信也初や其親兄を滅  
され竹葉眼をらんや小仁を顧みて後の患と殘せるや和漢其例の後と  
少藤藤子より大又信盛が朝御を逐せ世に傾けし道に云つば得業  
を殺さんととれた三人の輩思歸りて事を早さばこれ依て南都の徒又  
圍とある後之より又長岡兵部を捕り得業別腹の所舎を認明して  
之武の藝又達也世に甲斐しく座に熟飲乃あるを考へ自抗耐と  
つ以同し三路が兵系都へ来りて事と云丸圍と云は衆後の力を以て大款  
又對んは恐怖が怒り信速と云は如しと或疾又三の患后と計りて定  
め門を奪ひ悉びやう小遣と云は江州中郡妻鴻を心どして為給ひと  
御門後の人々とも知り若らうしうが勢と云は之を知らうき夜明く後

西大寺の衆後けうをば殊も移り先寄手乃方以斯と作換く  
後々もぞ松蔵秋より力あり京都へ降りけしと若く小松永之秀こ  
ぶしを掲つて懸るゆらき人々方人後代の名柄をばはらるりの悔と云  
け人違俗と三人衆誅伐の旗を掲らる時後悔勝を懐た及ぶと  
忽三人衆は致し長慶を長元系を義次を守り大和國多門の處  
は籠り歎けれと云は教名の合致及びひらるる或は三人衆南都へ出張  
大佛の堂に陣を名ある付之秀出表して三好勢を破り劍へ大佛殿と號  
する衆後對しけ時の怨恨と云と云や

或は云け耐後朝臣本親守と云る光徳上人を御い上人即後信  
也して三好を滅され被輩も師檀の力を以て後又助けあり也と云ふ  
去虛況乃甚しきその後信長と云本親守殺年合戦及び其時  
より河出馬ははせしあり初め上人の助けあるは軍をさぐ云の報

悉くくやこりしのみをなして其偽流たるを推せし

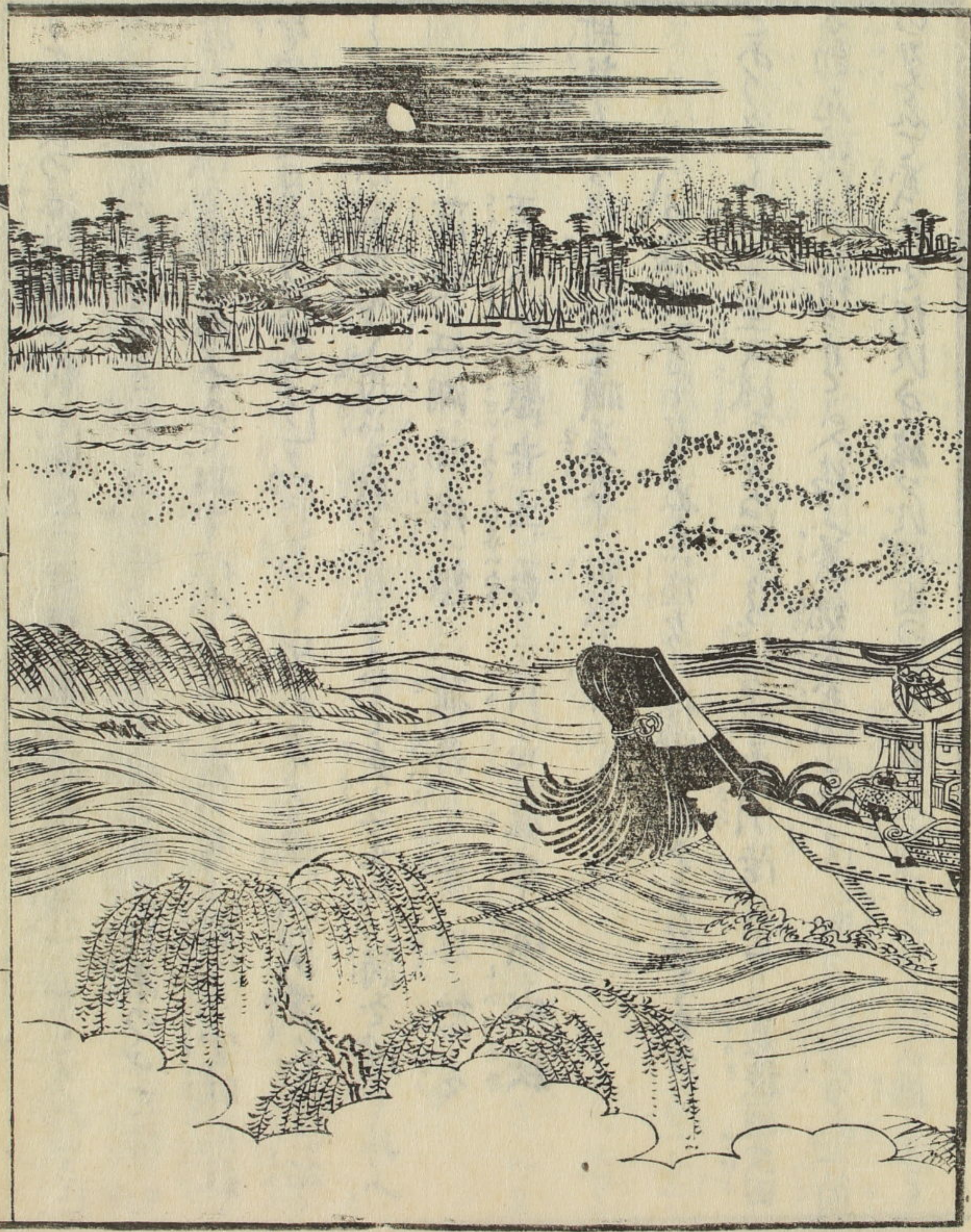
得業再奪漂蕩干西湖條

却説是度得業虎口の難を脱し道に困る所の任人和田守が惟政  
を殺し治ふに惟政一をに及びて匿ひあせし軍再興の兵と揚令  
長岡兵部を捕らふ者となし忠誠の人々を懼れし大坂治部を捕らふ三  
開大和守及英泥田尾湯門耐法貞系極近に守る成仁本守守者度二  
之式部を捕らふ長と押中勢を捕らふ政二階堂後河守徳勝母後曾我  
兵衛助といはし十余人公家といはれし中御教朝長和田が獄中集  
會して津邊信を執らし河合義昭と稱しなり永禄八年の九年まで  
安は通箇由はしむる和由依り其兵部を捕らふ義系所居之抑は州より  
六角系極遠舟の三家あり一國鼎のどくに祖立に南に心老と東に  
國中又と名を稱せしるもの六十余人あり三ツに分つて三家に屬し

ほよ平居して合戦終るをたなく枕中六角依り本をばは湯の大庭敷と稱  
け家依り本を即定綱の後胤代々親者守りて城せしけ附り登敷依り  
本兵衛をま義秀といふ若年多福あふより一族の老六角彈正親  
義賢入道按園次義禎といふ者あり同國其他ありて後見しなり今親者  
又従へ其男右衛門依義禎といふ家勢はなり義秀は令に居りて威勢  
を震し北智川公園の地を領しれどしをに南の依り本と号し又系極依  
本といふ定綱の舎弟に即る綱の末系にして代々坂田郡佐吹山の西隈山  
守りて城せし近來系極兵衛をま義法といふあり武威行と名を表は  
た登がじといふ家と申しに閑院家の御子三條大納言云綱御といふ  
あり後花園院の勅勘を蒙りし州津守郡下守里と号し其母間の女と  
て男一人を授け其年勅勘を免され母子を愛し隣りて居居はし  
け子を彰三郎といふ十三歳の侍女のみを同ふ及んで其母系國光の刀

一振と云綱御の書係るたる系圖の書とを死せしむと見せしが扱ひは  
武間と在る者より河津と系極るは鷹野の路に於て仕度せしめ  
を祿のひ初め小姓より仕と次第を挙げ用ひらるる浅井新左衛門尉亮政  
と名系其後系極家此家後を押奪ひ浅井徳守亮政とし其男を徳  
光守久政とつひ久政隠居して古徳守と稱し其男徳守長政とす  
斯ては河津三好が後軍を執りて後河津の河津義宗を帝都に迎へ  
軍れ宣言と賜る言は「致奉り朝廷に」の輩が幕府を悪と為すべし  
義宗と河津許さるる小族に付たる狼藉も及んじ計は「諸御食  
議の上より細かく河津の河津を以て軍宣下給ふべし日向守下我ら  
大々致奉り」是か元慶得業此河津を掃り求むる近は國交後在る  
軍勢を石振るは「河津が扱ひ小卒の義より河津と六角入道義禎が文  
御教書を以て義昭と討せん」は近は二國の守護職を賜るべき也

き「なる元来義禎歎心憾盡の老法師やぞ軍勢を備へ矢石も押寄  
るとは多し大座敷兵衛を義宗の義禎と名とすは「制法せし  
にや」西の取伏の侍より見ゆきた内心行るるを仕度「と」  
を以て付たる方より徒らもなきや。河津守が方「若ら」は若狭國  
の伯人武田を即左衛門義統の方「奉り」奉ると長國及若河津にて曰く  
八月十八日河津に於て西側は徳人の出陣し河津の内を「た」りて  
揖々今河津に於て船をとりしに夜に入らば後風荒く河津比良の山  
麓は湖水の波浪天を躍り河津に於て覆らんといふ船は皆溺とす  
んこと河津に於て捕着んと何せは元風暴して心は任せし人々安ん  
たう三浦むりを纏て河津中を奉りて小松の浦に於てせしむる  
は良の林幕にあらず人々希なるが其夜に船中より明とせ給ひ義昭公  
及び河津の人々湖にのぼり身を濡し給ふす此乾きぬるは八月廿



昔王旧力篇卷五



義昭御  
落崎  
西湖の  
月と足  
冷山  
國

昔王旧力篇卷五

て比良の海風膚と削り南都の秋雅と服は移して分後二とせむり此心は  
内は破戒の罪を恐る外は至悲の情を懐き誠方終末の事大悟の  
終の沖波を催し終ふぞ船中此人くとう願わなるわう。雲晴風靜  
野の後三日をり此夕たう。月もく水のおそを照入の澄人をこし招く  
どく風系る水面白く月より秋を慰るよと矣立立如詩を感し終ふ  
落魄江湖暗結愁 孤舟一夜思悠悠  
天公亦慰吾生否 月白蘆華淡水秋  
斯提くたれが兵部を補後考り秋歌を詠ト

よるが三三とたりぬは海の面よりなるとる  
とありたる小船中坐し波をぞなごりて夜明陸より。若狭國武田  
を即ち備門義統がりと入終り義統忠臣の心極くし。わが小舟は一箇  
の力をて我兵を起し終つて月國の恒人業を誠中守三好又願ト

討奉らんとえりよはば家にも擬り終ふ難く。誠若一葉が若乃城を  
朝倉元備門尉義系とて人あり。大牙とひ家柄正しく。家士教多きと波石  
と上野中務大輔を御役として軍再貞の義を教し終ふと評義まきも  
ちう飲豊し一族朝倉孫三郎系武とて人を御迎し。同九月廿一日一葉が  
名入なり。是か新將軍と名稱し。教日御食膳を盡し。教が郡金。傍に  
御禮石を嘗て徒し。事くせむ故を君れど。月々の御賄賂料さう且  
関うらなう。永禄九年八月十一年と三年此間此地はしくる

義昭寓朝倉稱大樹條

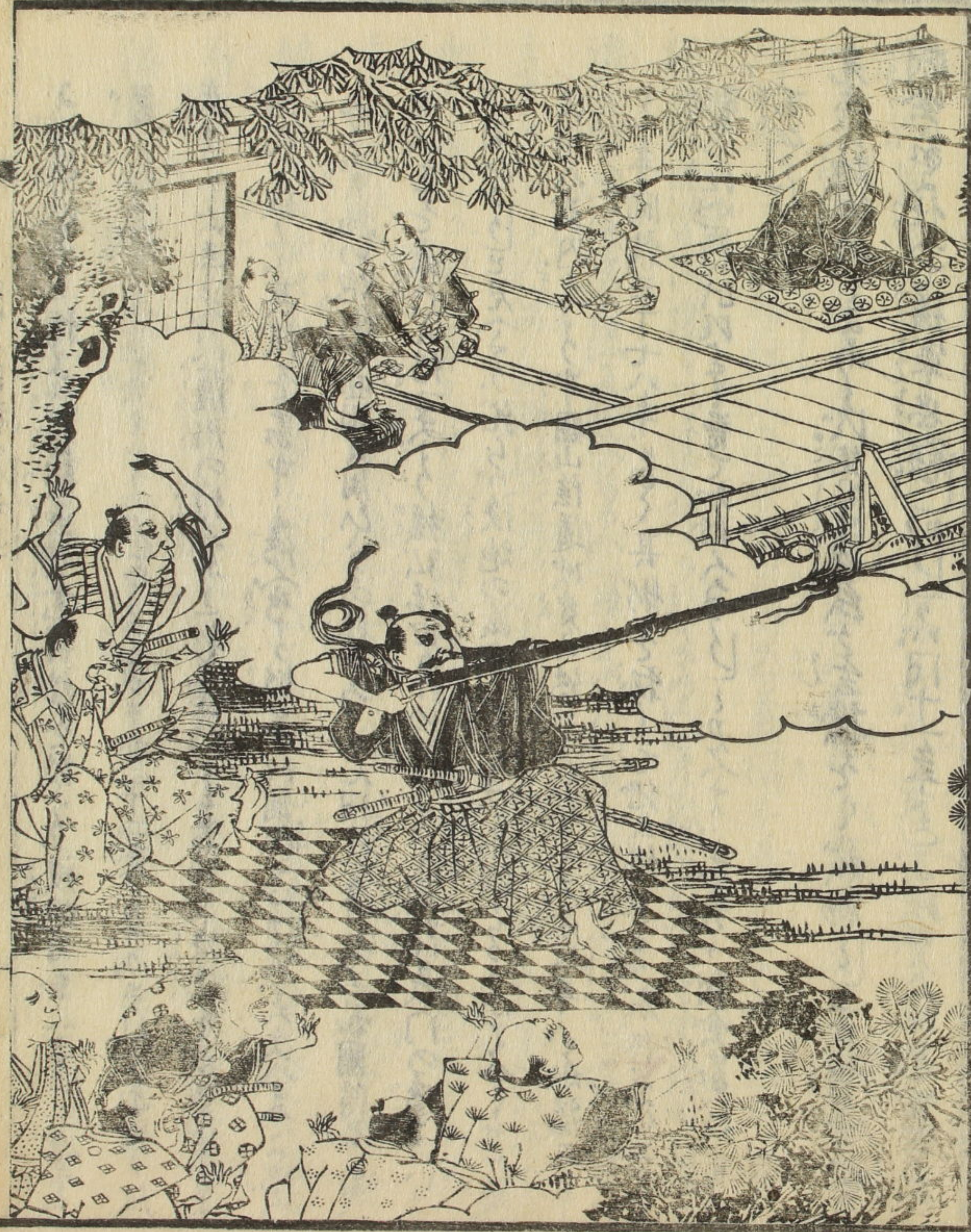
抑知余は。とい人皇三十七代孝徳天皇の皇子表末皇子也末系よはは  
い他馬國朝倉の郷に住し。其子孫是利為氏郷の治世誠若に徒と代  
同國の守護武衛家。後ひ家老に人の其一人なり。不謂藤原二宮小田  
朝倉之。武衛家次子表末武衛義廉の附小田尾張國守護代

如朝倉源左衛門敏康主人武衛を以て城を相領せしめて  
 備はるる天守朝倉に伏後、南義系より出て又代武名を三城の  
 震、其義系其性老實との内、又此の機、勤、合戦の因と  
 る。既、新軍を以ての上、速、三好家、誅伐の兵を起し、  
 名号、隣國、郷の、下、應、天下、諸侯の上、に、抽、兵、を、諸國の兵  
 素、聚、ると、俟、て、後、又、年月、を、累、年、新軍、を、教、回、催、使、し、給、ふ、と、も、  
 子、と、元、右、は、せ、と、果、て、家、主、に、軍、心、を、の、い、齒、と、喰、切、と、い、ひ、の、は、  
 家、明、智、十、五、湯、光、秀、と、い、者、あり、其、元、祖、を、易、と、い、源、頼、光、朝、臣、の、八、代、  
 の、高、橋、は、後、英、徳、守、光、衛、と、い、人、あり、と、い、は、家、の、元、祖、を、十、代、の、後、胤、  
 明、智、十、五、湯、光、継、が、嫡、子、之、英、徳、團、明、智、と、い、後、未、初、推、の、附、と、い、後、明、  
 智、共、軍、を、先、安、と、い、者、此、の、光、秀、が、叔、父、即、明、智、の、孫、也、之、先、安、は、後、治、  
 部、主、頼、義、龍、と、い、が、と、い、光、秀、叔、父、の、孫、也、依、て、城、地、と、既、其、後、丹、波、國

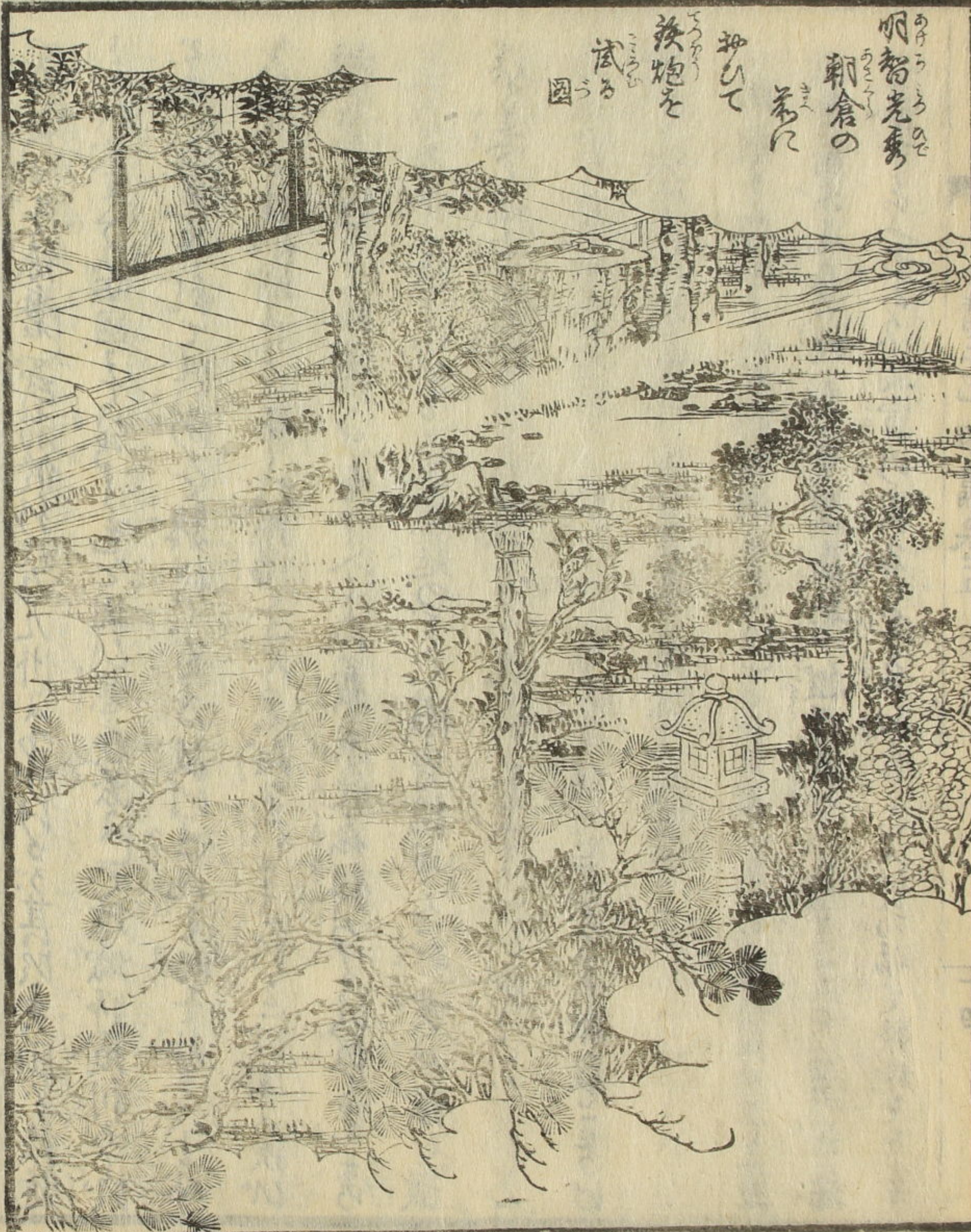
は、て、武、衛、を、練、磨、武、者、修、行、は、る、九、州、より、け、る、其、以、英、國、が、鉄、炮、  
 と、云、兵、器、と、い、西、國、と、い、也、と、云、と、因、以、甚、疾、差、は、て、攻、城、野、戰、利、あり、  
 と、い、は、光、秀、が、其、術、を、熟、得、百、度、故、以、三、丸、の、的、を、射、し、  
 と、い、り、其、後、小、園、より、布、れ、戦、場、を、見、る、小、此、義、い、ま、と、い、は、國、は、  
 朝、倉、に、依、り、て、鉄、炮、の、子、を、一、つ、義、系、に、斜、に、以、て、光、秀、  
 と、い、を、示、し、は、る、小、郷、を、三、雷、雷、廷、の、と、い、鐵、甲、を、打、黄、の、紙、と、鐵、  
 以、を、安、士、諸、士、醫、治、せ、と、い、者、と、い、光、秀、家、系、と、い、は、  
 乃、人、の、以、て、二、石、の、孫、を、与、兵、士、三、人、を、從、い、せ、  
 炮、術、を、傳、へ、し、け、耐、永、祿、三、年、光、秀、年、三、十、三、歳、  
 頃、鐵、を、按、じ、り、小、鉄、炮、我、國、より、し、り、り、天、文、八、年、己、亥、八、月、廿、日、薩

摩、國、赤、尾、本、の、倭、南、蠻、國、の、高、助、一、艘、漂、着、せ、り、船、中、に、大明、國、の、儒、  
 五、峯、と、い、者、あり、船、賃、乃、長、谷、村、良、叔、舎、と、い、け、者、始、て、鉄、炮、と、目、を、





Vertical text on the left margin of the first page.



明智光秀  
朝倉の  
着に  
押して  
後炮を  
試る  
園

Vertical text on the right margin of the second page.

又信長は島を種々兵部無曉其情をたす。後炮日本へ来り。始と  
 考れぬ。抑さるいけ。美まうて。今あるまを二十二年あり。されど東國は  
 まう十六年。若く薩州の倭人舟と。新九渡門と。者あり。後炮を武田系  
 信虎に譲り。其法を家中。倭人。若く彼家に用ひ。其法。天文八年。又信長  
 あり。密納の炮術。西國より。始あり。人曰。十一年。又大和國。信長家  
 國ひ。を畿内。信長。又。後弘治。四年。の。以。ま。周防。長門。の。邊。い。ま  
 ぶ。用。ひ。び。じ。と。人。う。然。る。後。炮。の。流。布。と。る。東。國。と。る。小。も。其。後  
 九州。又。畿。内。ま。う。中。國。山。陰。道。次。又。信。長。の。也。大。永。正。年。分。永。隆。三。年  
 と。年。同。稍。三。十。七。年。家。其。術。を。秘。して。他。に。傳。へ。ら。る。が。兵。部。の。工。部  
 製。の。法。心。國。に。け。以。て。曾。て。知。傳。人。と。り。と。人。う。先。秀。が。朝。倉。家。に。仕。居。の  
 不。以。これ。

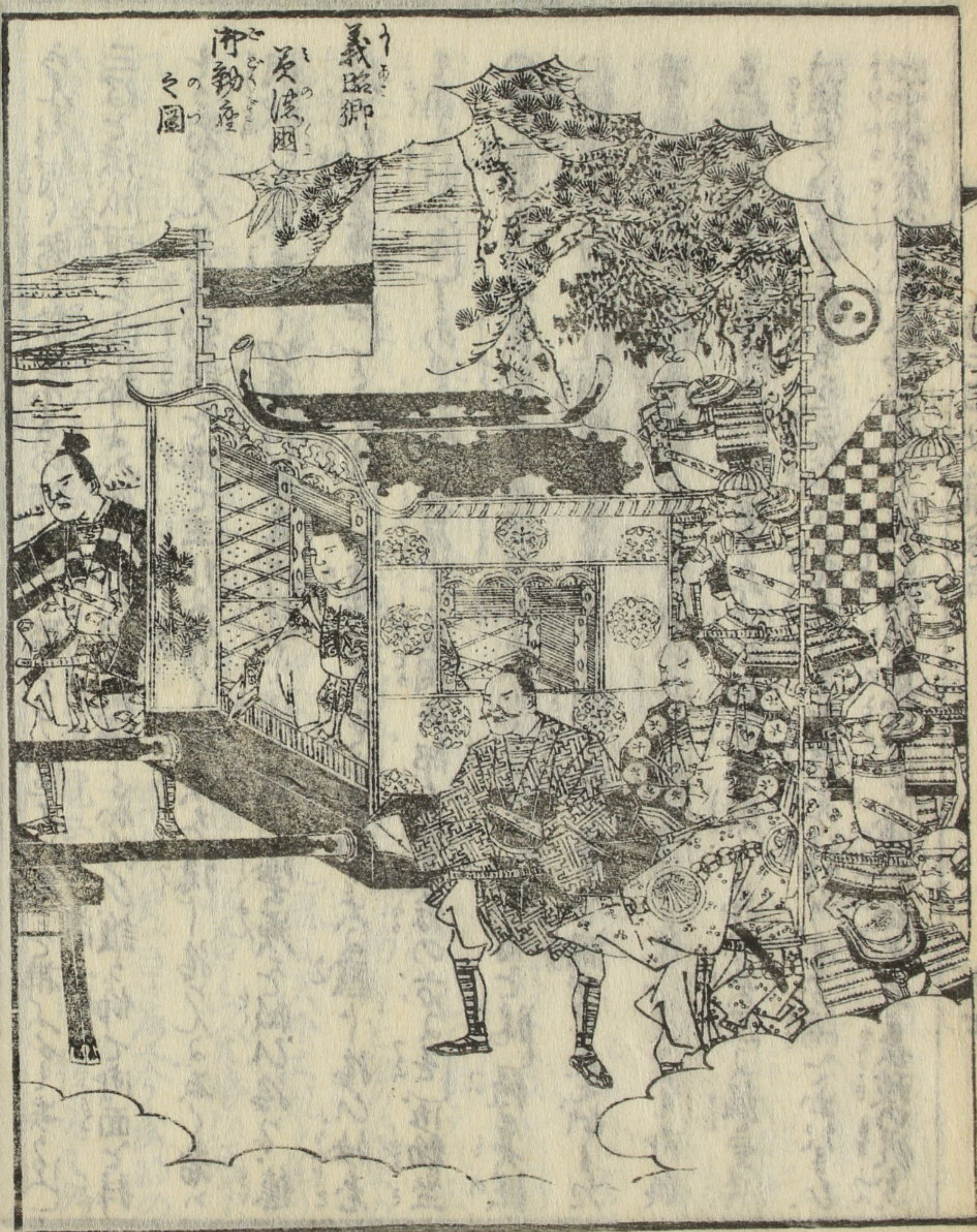
先秀の炮術のよきあり。其子孫武が。主機を。我物と。する。智勇。此。士。  
 朝倉家。仕。て。後。軍。忠。駿。の。り。は。十。一。年。と。又。改。元。加。懸。せ。ら。る。

六子。若。く。家。老。の。中。に。列。居。せ。り。信。義。系。が。義。兵。の。師。と。疑。傳。諸。士。の  
 海。と。國。ひ。を。見。ら。る。私。に。新。軍。れ。沖。津。と。あり。や。る。後。か。く。在  
 行。の。年。又。旗。揚。仕。と。す。即。今。若。の。義。旗。を。帝。都。又。押。立。き。り。の。い  
 獨。美。法。國。後。軍。の。城。を。求。信。長。より。外。又。あ。は。た。ね。せ。び。今。に。も。沖。津。を。な。く  
 信。長。が。早。速。美。法。に。迎。へ。も。は。し。居。と。又。一。代。と。る。思。得。に。仕。て。必。を。持。え  
 る。か。若。い。あ。ら。は。葉。く。の。沖。津。を。幕。ひ。あ。ら。は。し。進。じ。て。附。長。を。失。ひ。沖。津。を  
 勿。と。度。多。う。新。軍。に。其。命。を。惜。り。終。に。密。偵。を。揚。ら。ん。と。思。は。る。と。先。  
 先。軍。朝。倉。家。に。仕。て。又。武。衛。義。廉。を。と。し。つ。る。う。り。小。田。家。と。卒。前。記。り。當。時  
 信。長。系。系。の。世。に。あり。困。隔。り。合。戦。に。し。つ。た。先。祖。の。遺。恨。を。な。て。ま。ひ。又  
 不。快。れ。中。と。信。義。系。系。思。味。は。て。奉。を。果。さ。ば。と。ま。さ。る。奉。の。忠。節。を。棄  
 信。長。と。戦。ひ。て。か。ま。さ。く。思。へ。ら。ん。と。何。と。も。く。進。く。よ。及。び。終。ひ。る

又樹出朝倉投信長條

中宗孫と追藤交つて長安よへて御山に在りて人天中れりと通ふ味一り是利の  
 覇權一度輝く後各國威を競ひ狼煙須臾のるも終る所なく爰は小田原正  
 忠平信長釣魚愚圖を治め給ひ「後諸方擲きつて」應に甲州武田家  
 縁若くは多謀良名士目く又集り家門の繁栄計附くこそ月久に多一日  
 本不反者即元吉其若くは信長朝臣其威を同給ふ爰は  
 改め諸候を乞ふを捨てたる者は「信長朝臣其威を同給ふ爰は」  
 將軍義昭の身を信つて一遍朝倉義永たまく乞とけく致て果さば救  
 奉心や此紙若くは在に我若くは密偵を乞ふ。又徳川初勅諭と初め將軍の  
 為兵と記を宣りて多き事終る事いふ事又天下大乱と成り  
 ては以隆今よあると諸侯國を論ひまひ隣國を相害つて元勢ひ天下  
 此は進者なきと如何と云ふ余私の裁ひはして軍よなきを乞ふ今武昭の  
 為兵と揚げ是利の表徴を賜ふと云ふ名號心くまて誰う後方もい

多き乞ふ者いふ者名不義の師を破るるの電とれ塵を拂ふかき要らば  
 三好と徳川旗を帝都へ入給ふ武昭の執權も多給ひ誰う仰て御面と拜  
 とも者多し其後勅諭を備て王化を背く諸侯を誅し終るんよ及く者い  
 朝敵の名を悉く切廢け百年乃私を誅め民の陰炭を較ひ終る徳  
 永明に記をよび「と懐抱して速るるよそ小田原を大に感し終ひ汝若  
 し南に討ふ」とある小田原密偵を長岡兵部を彌友考の方と遣はし勅諭坐  
 の表と物なる小義昭と若居涉又私をばさるごとく朝倉と陸「後又徳  
 川勅諭に」けるこれ明智光秀義永が側在て事と調ゆる所之げとた  
 義永の族兵部を彌友考と二ふ余請の兵を副て送りたり其方より御  
 乞はる命を勝りたりと云ふ軍年以の懇志を謝し終ひ又徳川勅諭に  
 け後長く信長と和義を立給へば若くは誓紙を揚りて金も勝り出たまひ  
 此柳の葉は若くは若くは近江路英徳流といはれ侍故元守長政の御

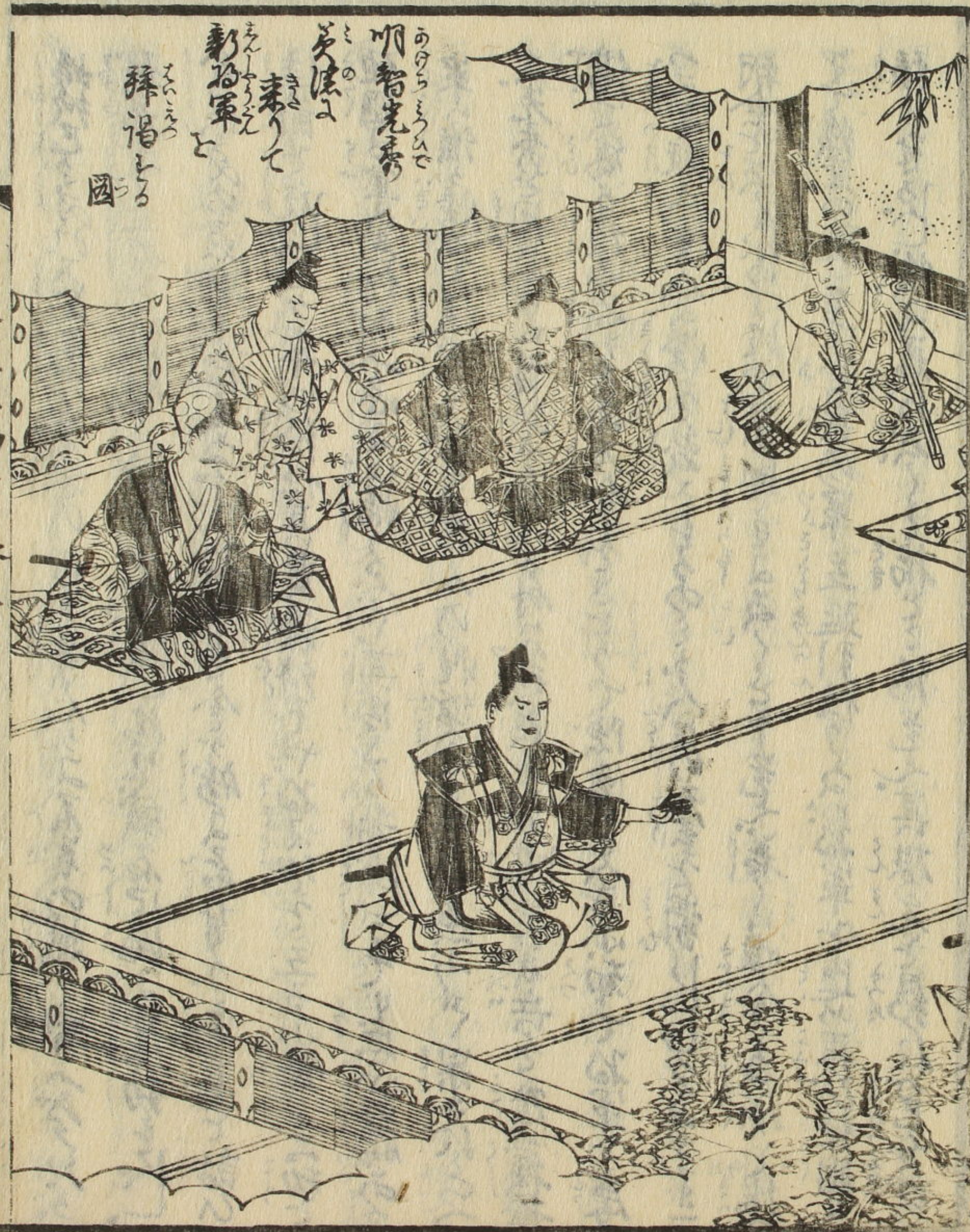


海峽舟の朝倉の麾下、是かき信長朝臣の妹於市の方を以て長政の  
 軍に婚家の暇を就て信長の為の妹嫁りしが、其家、對し、藤原の  
 ち、海峽舟と抑う、海峽舟と抑う、迎へり、蓮大寺、河守、丁、神、若、徳、守、二、又  
 余、請、よ、以、て、新、將、軍、を、受、支、本、の、奉、れ、名、入、奉、る、お、軍、の、將、衣、を、腰、輿、に、置、き、  
 長、國、兵、部、を、捕、り、中、務、を、瀬、川、内、の、人、に、布、衣、を、因、付、し、烏、帽、を、渡、送、  
 の、軍、の、用、心、の、為、留、甲、冑、を、兵、杖、を、携、へ、り、海、信、寺、の、入、院、院、入、奉、り、  
 彼、亦、長、政、を、迎、へ、膝、上、に、坐、り、饗、膳、を、勤、め、然、亦、送、り、し、て、来、り、  
 半、眼、を、揚、り、て、悲、く、帰、り、今、後、通、り、と、送、り、き、り、柏、原、村、若、善、提、院、と、  
 丁、建、蓮、寺、の、あ、士、路、次、れ、行、敷、き、を、護、送、し、奉、り、せ、小、田、家、の、入、院、院、内、  
 中、内、差、勝、女、若、谷、右、衛、門、三、子、余、勢、を、率、ひ、出、向、ひ、腰、輿、を、受、取、り、  
 改、葬、家、の、小、谷、へ、歸、り、永、禄、十、一、年、七、月、十、八、日、又、徳、國、西、原、三、政、寺、の、  
 命、に、ぬ、斯、て、お、多、十九、日、お、軍、家、給、指、の、為、信、長、朝、臣、三、政、寺、を、来、り、國、

經の所、刀一腰、華毛馬一疋、紫糸の襪一足、洗香一付、綿百疋、若、羽、衣、  
 貴、衣、と、新、せ、り、ら、新、將、軍、家、御、盃、と、下、さ、り、偏、三、好、殊、法、の、衣、た、の、  
 思、は、ら、し、仰、出、さ、り、多、く、信、長、謹、で、御、掌、に、長、不、肖、の、衣、奉、亦、の、中、  
 條、以、て、幸、々、武、門、の、箕、衣、を、送、き、我、畧、家、に、あ、り、進、く、一、年、通、  
 り、一、月、の、内、は、御、旗、を、京、都、に、懸、く、凶、徒、の、殊、殊、踏、を、お、し、と、さ、り、  
 亦、即、御、殿、を、造、營、し、令、彼、玉、湊、の、兵、を、献、り、な、り、今、又、遙、く、勝、を、  
 御、儀、長、く、と、推、考、其、良、と、を、願、と、斯、る、儀、は、三、寺、額、に、奉、  
 る、の、額、は、長、が、會、員、格、に、何、く、次、と、言、上、の、有、長、寛、を、以、似、と、り、と、又、其、  
 辭、を、い、さ、だ、く、お、軍、を、と、り、河、内、の、人、々、を、お、り、義、系、が、人、物、と、さ、  
 天地、の、遠、遠、真、は、威、風、凜、々、と、して、唯、今、は、大、事、純、以、て、以、て、  
 何、も、目、と、目、を、見、合、せ、義、昭、を、御、院、表、限、り、な、り、と、な、り、  
 本、中、論、妙、妙、拒、免、条、の、條、

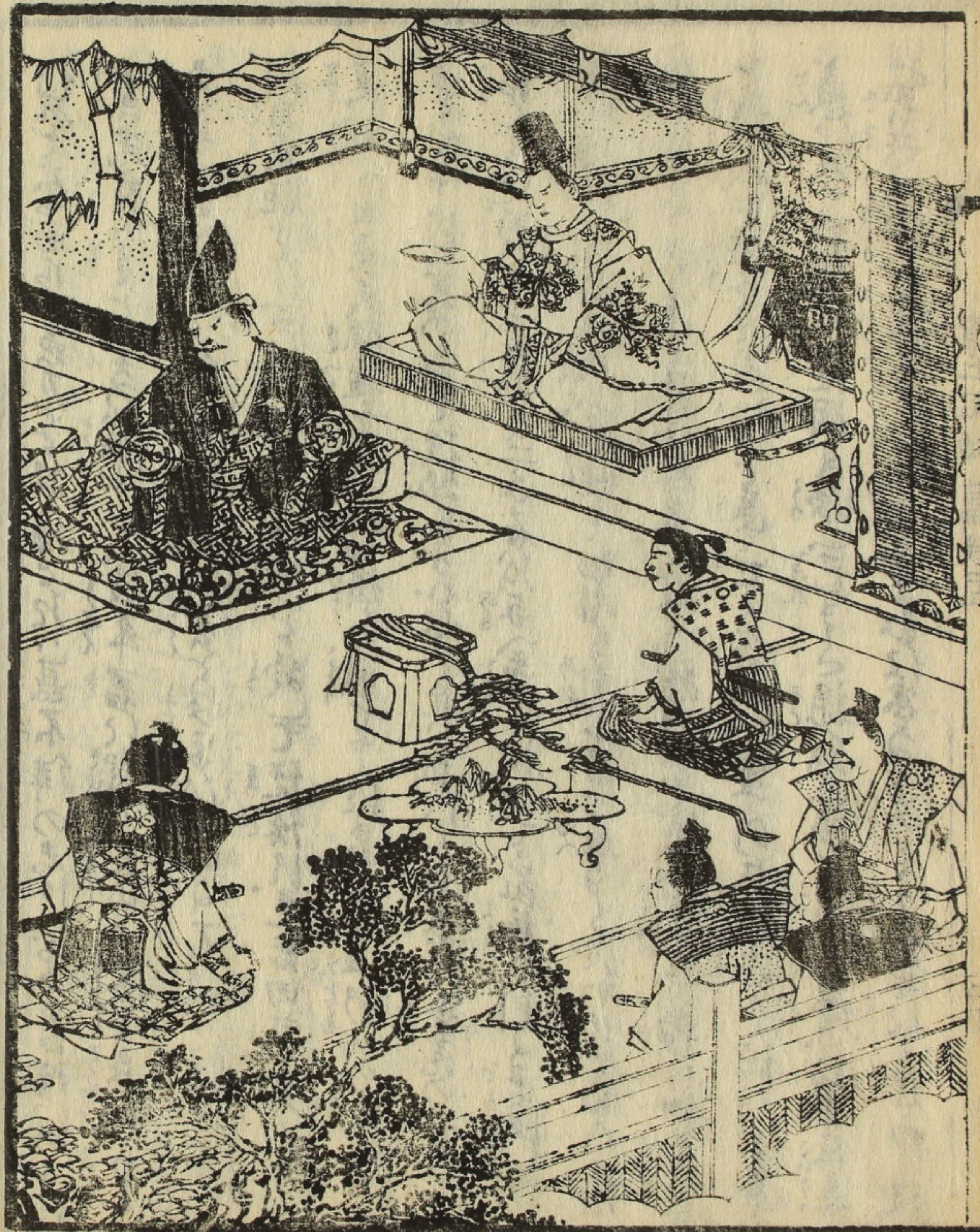
神靈其の本に捧り。禽獸や雲鳥麒麟あり。嘉慶本に神靈其  
其のふに於て長旅ある。其責去ふ。如た給や我國に於てや朝倉  
義系既乾國の掌にあり。如た明智十吾。先秀其と看做し。朝倉  
軍家退座の後福と辭て。英徳に乗り。其義昭に添く。其歎まりく。  
信長朝臣と名。先秀が家系承ふ。今敏動座と動つたる。た或い他が  
誠者よは。附の勤功。くは物語。せ給ふ。いとより機を換して。才と統  
め有る。志き先秀を名。義兵の。長日兵法の機關を叩いて。同あふ  
は善る。木の確論あり。解きを挑ぶ。く。胸中。は解る。木の才。限りなく。り  
くは。信長福を定めて。先祥。日。因いん。と。給ふ。附。諸。給。一回。は。我。若。と。て。必  
義兵と。給。給。附。又。徳。と。かり。麟。角。の。名。士。を。以。給。給。今。日。附。諸。給。の。義。徳  
と。祝。と。本。下。義。吉。即。元。吉。一。人。曾。て。洗。せん。即。こ。れ。を。顧。て。宣。ひ。たる。も。  
諸。人。皆。服。して。先。秀。を。應。る。ふ。は。一。人。吾。給。給。び。敢。て。一。言。も。出。さ。る。も。

何れを本田信之助に忍びを以て推して其不祥の者。又は吾徳にありは  
破先秀のいと愛の城は。して後年。義に背く。此の。速に退けらる。と  
あは美の吾徳の。一人。座の。諸。士。け。一。言。も。宣。ひ。は。心。の。不。後。を。懐。味。田。田。諸  
川。目。東。肥。く。る。は。其。か。殺。し。く。惨。り。と。愛。て。死。活。に。元。吉。曰。其。先。秀。が  
更。及。く。も。天。眼。通。を。如。給。給。後。を。敵。て。中。は。あ。ら。は。唯。給。ひ。の。不。後。を。  
と。中。に。以。て。吾。の。后。を。救。助。と。る。い。承。く。其。家。に。と。り。若。后。母。成。の。母。へ。と  
あ。ん。が。る。之。義。系。義。徳。は。三。る。石。乃。与。へ。重。く。因。ひ。て。家。長。の。別。は。是。也。く  
比。て。加。護。は。不。も。及。ぶ。他。を。如。給。給。電。と。る。が。あ。ら。は。は。や。若。若。の。後  
讓。が。ま。り。已。知。り。の。お。小。死。と。と。り。尤。ら。先。秀。一。命。と。換。て。知。こ。い。恩  
と。被。じ。一。怒。を。も。恩。福。と。辱。せ。る。勲。將。軍。の。あ。ん。志。を。傾。け。義。系  
恩。に。及。て。將。軍。と。他。國。へ。後。に。已。ま。る。福。を。棄。て。去。り。去。り。軍。再。眞  
は。義。兵。の。後。人。と。と。り。も。の。朝。倉。家。の。忠。と。是。の。こ。う。將。軍。に。忠。の。心。



清正記  
 力  
 五

七  
 一



清正記  
 力  
 五

七  
 一

後援にがたれぬ。是を不忠の臣と号し。又名義の賊と唱ふ。今も  
 我君近と三叔と流獄。御軍と守護。終つて威名に海は震動と也。  
 義系父の忌味とは云ふ。御軍を令が勝る。是を若と訪ひ  
 佳節と成。三ヶ年の給仕其費幾許ぞや。御よ切を立る。小徳も功と  
 他國は奪は行か。心よに勝る。其臣も若少。して心忠の賜ある  
 軍は惟る。勝ると懐。らん。笑。悪人の性。賢也。義系。忠。果。は。は。は。  
 大光秀と用。る。つ。月。ひ。う。就。御。幾。度。も。流。味。て。兵。を。辱。め。後。援。  
 傷。て。御。の。御。の。忠。心。を。天。命。を。こ。り。て。際。道。と。云。ふ。亦。知。て。御。軍。と。辱。  
 せ。し。は。敗。去。る。人。の。懐。を。殺。さ。す。の。人。の。塵。を。舞。ひ。し。ら。る。も。一  
 朝。念。と。云。ふ。は。あ。ら。や。某。即。ち。云。ふ。と。中。是。と。若。く。唯。今。も。福。と。揚。  
 して。後。軍。の。障。り。て。兵。の。軍。立。延。引。侍。り。る。御。軍。と。進。み。再。び。他。國。に  
 後。援。を。得。し。後。又。若。く。云。ふ。と。指。と。は。是。之。其。根。元。と。見。れ。ば。己。分。外。

御進と辱むる。御も。往昔か今も。ある。と。云。ふ。の。之。を。心。と。し。る。若。い  
 者。に。不。忠。の。心。と。え。ば。後。は。主。を。計。る。者。か。ら。い。ま。ま。を。い。く。殺。て。死。せ。し。ま。う。  
 す。こ。ね。る。者。又。放。て。刺。首。と。飾。む。九。顧。る。元。より。是。由。の。致。と。成。す。と。悼。ま。す。  
 不。ろ。く。や。い。ぞ。一。種。は。あ。ら。う。て。一。言。も。若。る。者。は。信。長。朝。臣。完。成。し。て。笑。せ。  
 ろ。い。後。者。や。条。理。も。通。さ。う。就。大。流。る。里。れ。名。馬。も。伯。樂。も。遇。さ。し。は。  
 免。く。極。東。に。討。ひ。ら。る。と。つ。う。明。智。が。た。れ。い。子。里。れ。名。馬。義。系。を。殺。し。て。後。に  
 才。機。を。こ。り。流。獄。と。去。て。害。よ。来。る。信。長。又。後。は。以。来。背。り。後。に。は。後。で  
 悪。い。る。多。し。縁。誅。と。用。い。じ。て。鉄。桶。を。石。の。場。り。が。果。して。後。年。若  
 と。鐵。桶。に。討。た。る。本。下。明。智。未。来。の。讖。機。之。け。き。と。感。せ。ざ。ら。い。ら。う。と。云。ふ。

本下明智後駕救信長條

小田を以て新軍勅座の後討日を候。旗揚め。合戦の圍を。え。ろ。  
 かつと。隆。り。三。叔。が。兵。多。勢。を。う。る。入。州。の。六。角。入。道。兼。復。又。は。日。國。目。野。城。





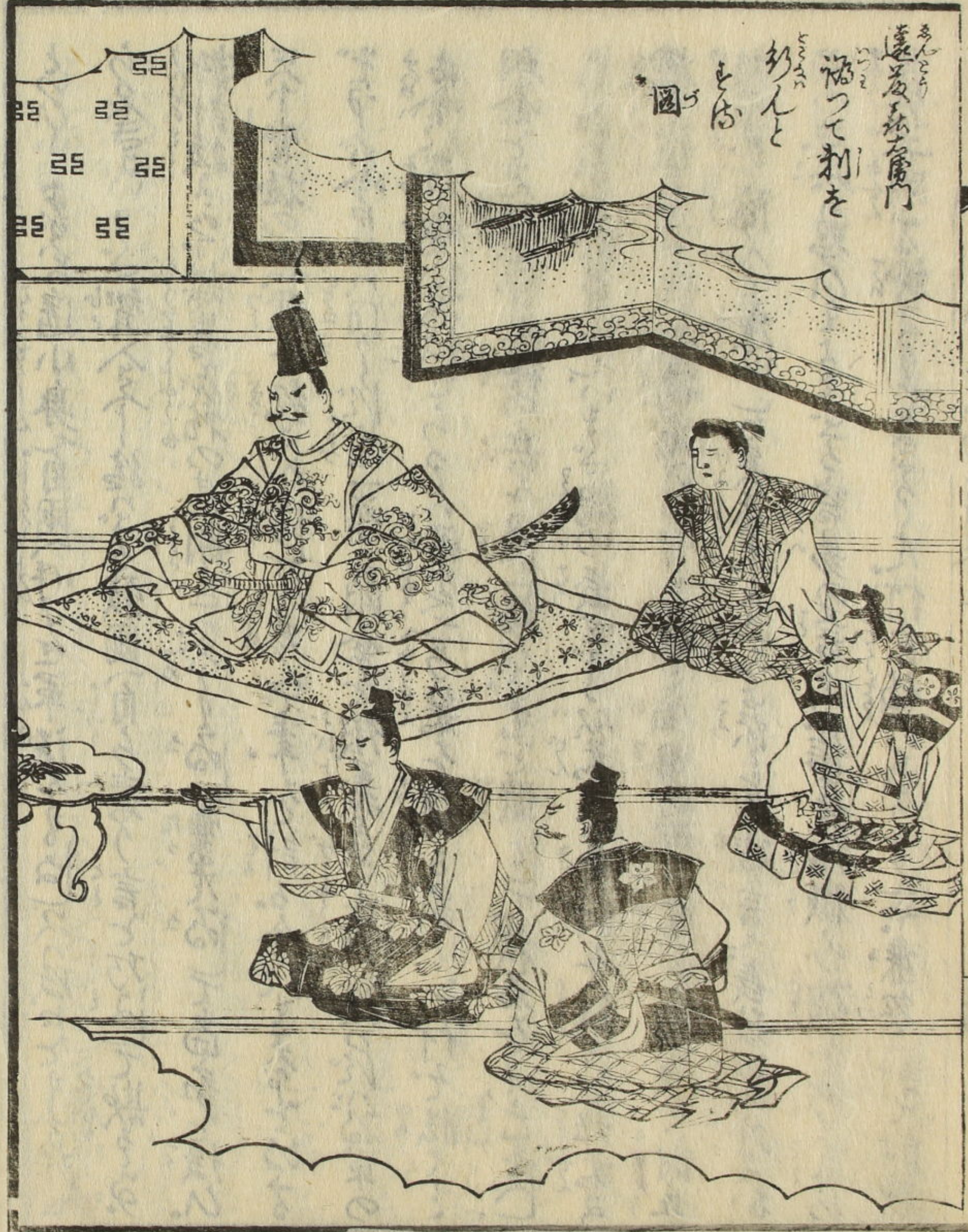
軍後と巡りし酒宴畢て後休ひ給ひぬ其夜涼る及び遠る長石  
傍口着基小谷より来る長政又見へ信長今徴執方を以て爰に來る  
是れがこころ秋のこころや小討を其後將軍家を我軍が守備し  
て兵と既し給ひ其夜先よ母及龍興爰に來り身を寄りしとき  
既し出軍とこころとて結構し給ひ其時信長勢ひ徴執方かぬ合  
我及す是出軍をこころとて第一之次は朝倉と小田の軍未離言と  
結ぶ向ふ我國の世々朝倉の麾下信長と知る是情りを換て聲に  
んとするのころは義系又討して不和ぬほしきなり紀清文を送るの偏  
又新將軍を迎えんとする討る所をさし塞るまづき偽計はて出軍  
とこころとて第一之次は親婚の耻を結ぶ入の母及龍興を返けしと  
下知るは行の遠慮ありん今よまると龍興の一言をもまれば出  
家と計は第三之次は新將軍許上洛の師記天下はたすのはして我軍の聲

とい小田家より遠小身之自國へ呼よせ軍後をもほびり及口とりみ附せ  
らるべきいまも聲を合へ給ひ給ひ我國へ自ら來り言と巧はて欺るなり  
新計後より謀略成就の其期をたすもる「獲たるはて出軍と後ひ  
天下堂極の上罪を犯さんとすく忠んて事を計る今に天下と成る  
ぞりふ今日といはくは先一番は朝倉を徴義系上洛」給ひ給ひ將軍の  
右命に背を唱へ謀計せらるるに必死之弓矢を推る家として何ぞ怯くと  
朝倉と見放し給ひ給ひ兵を逐し給ひ給ひ是と罪にして我君をさし給ひ  
是出軍と計は第二之次は獨の後せざる以て其奇計を返ると兆系は  
楯と鑑るともい今曉城の口方と圍と徴執方の討は際して信長と討え  
後の患除んと厚し給ひ其未系又凶を察する確言は長政の外はか  
とるべき此の思ひもさる容易の言る信長猿猴の指を傳ふ討の  
良の安閑なる所よりとるなり行系傳のさるなりや兼忽は計て討換



清正紀功篇卷五

北五



遠及森戸門  
 宿つて刺き  
 糸と  
 と  
 國

清正紀功篇卷五

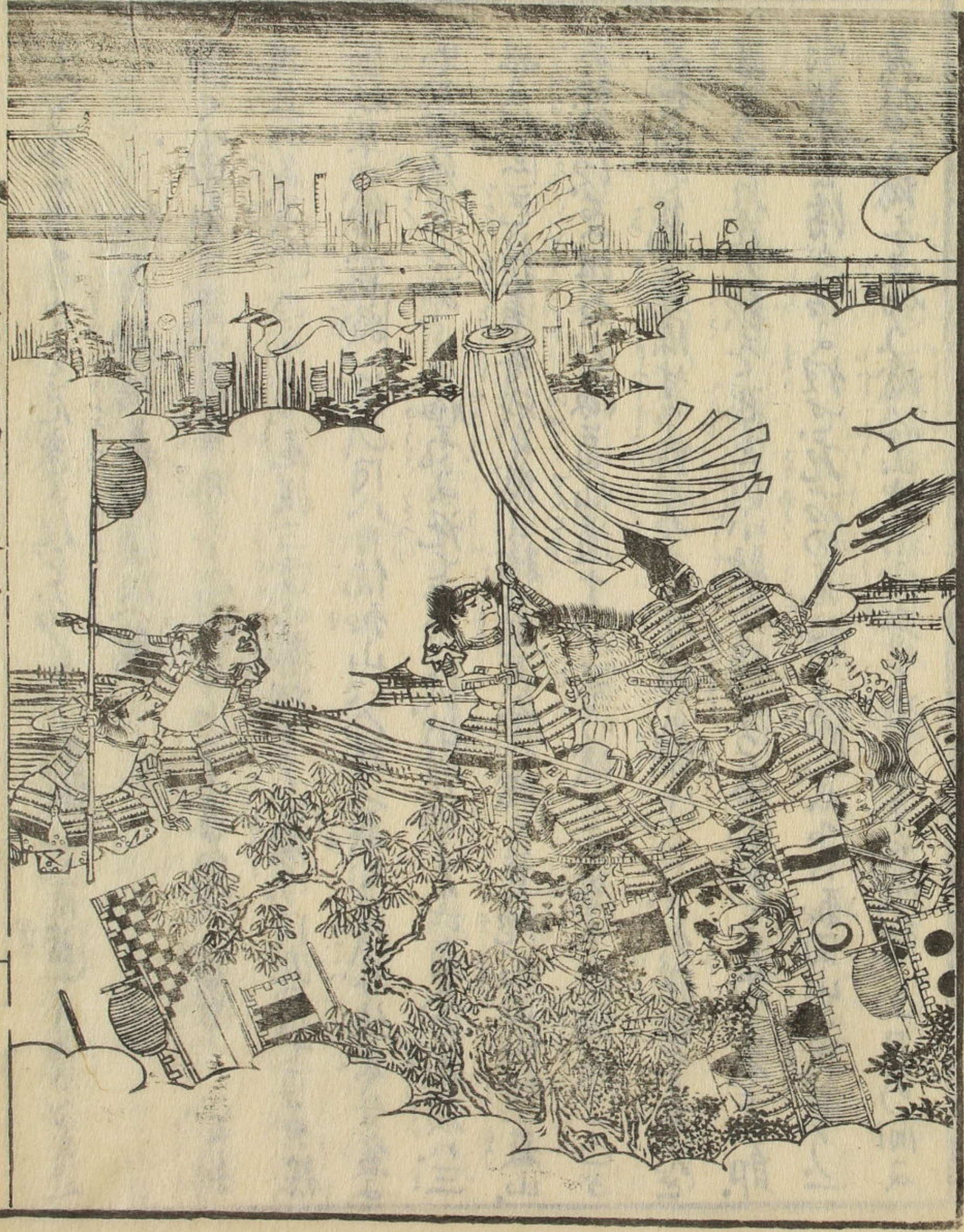


てけい行若ぞ姫光が白毛脂宰之魚の食物とつた脂宰のよに割せざる  
 附の美味よりいふに、いふに因て裏に出たり、條まの其懐中を探しむ  
 るよすのぬいば、裏に於て近よりしむ。鑄諸魚の肉を割符よりてさし、  
 忽急傷の剣とえ出、條を害せり。世に慎むべき、刺客の難之、平とせ  
 てか後北國の居る人を酒宴に近よりせし、少童侍女ありしが、坐る  
 に覺す、然も嘗て出家を疑い、さうふより、教目のる壯士、給仕は、  
 と、嫌す、今先秀が拒むの、此右衛門が武勇人、知らざるを、  
 鑄諸が刺客、いふに、疑ふ、かを、さし、己は悪人、き、奸悪なきの、  
 人、又、端より、異心あり、た、是へ、と、蓋をか、け、ほく、首途と、  
 酒、盃、乞へ、持、来り、以、と、其、酒、杯、又、は、怒り、さ、り、他、を、見、る、の、  
 象、見、と、見、る、と、く、其、情、言、外、に、是、を、蓋、を、え、て、後、と、  
 明智、淡、舟、若、屋、が、歎、き、心、を、付、ま、基、乃、動、き、せ、ば、長、政、又、  
 舞、り、

舞る、言、魂、遠、及、は、難、き、期、會、を、知、つ、た、信、長、又、後、春、抗、と  
 志、を、穩、か、なる、中、に、少、し、と、他、の、な、く、を、人、を、顧、む、後、に、安、閑、さ、り、心  
 膽、十、分、と、懐、ろ、と、つ、た、女、を、動、と、り、終、り、は、郷、餐、饌、終、り、て、後、供、奉、殿  
 様、と、て、小、田、家、の、人、を、主、人、を、守、護、し、て、花、後、に、此、の、信、長、碎、眼、懐、籠  
 なる、中、に、後、心、を、知、り、令、殺、又、踏、上、路、と、り、放、擲、し、て、拍、束、者  
 善、提、院、に、命、ふ、小、田、殿、仇、和、山、を、出、給、ひ、い、ま、ま、討、り、あ、ら、さ、る、小、淡、舟、の  
 若、老、妻、を、あ、た、他、守、馬、の、向、泡、噴、せ、策、を、よ、て、近、来、へ、信、長、の、帰、國、に  
 少、飲、ひ、さ、る、と、あ、り、長、政、遠、及、は、昨、夜、の、言、を、告、ら、る、と、又、他、守、齒、雷、と  
 は、老、人、の、言、ま、来、り、し、他、今、一、夜、通、面、せば、後、の、患、と、除、ん、と、か、り、ひ  
 来、り、と、言、と、後、と、り、遠、及、は、諫、言、と、付、を、合、成、が、と、く、長、政、理、と、是  
 して、大、に、悔、し、信、長、を、去、と、り、拍、束、の、若、善、提、院、よ、り、あ、り、て、こ、も、  
 を、逃、へ、後、疾、撃、と、り、け、討、た、と、破、丹、波、守、蓮、大、寺、後、行、り、丁

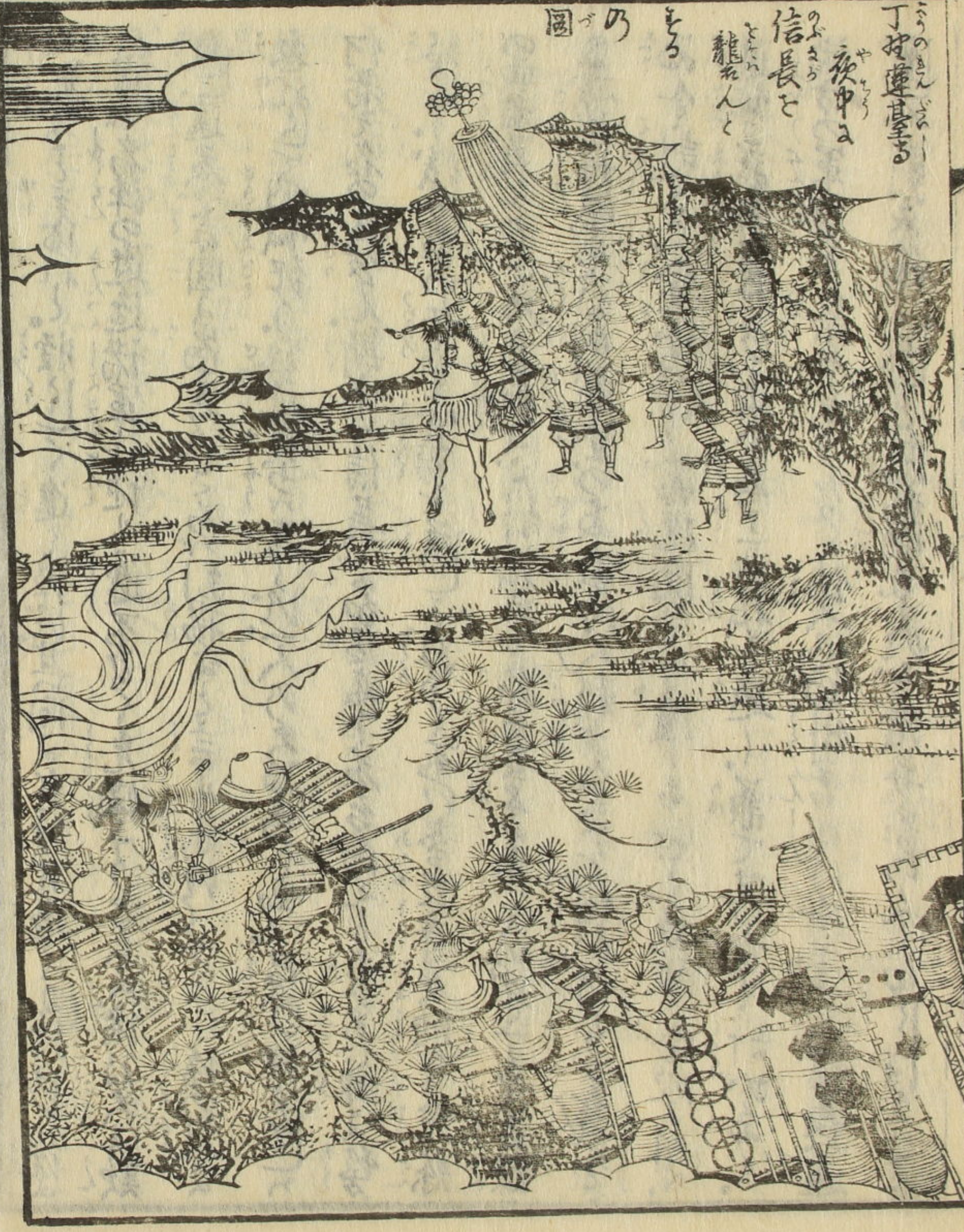
建長寺の遺兵に二百余騎を接し善徳院を籠めんとし遠坂が  
 曰既又延引其圖を外せり。善徳寺破れ又いづれかの二天虎和山  
 と云ふ又福永の名(枚)を啣て進もう。け附本下及吉郎と人々  
 放逐せらる。善徳院より後山に登り。煙をぞ揚げに多る。若  
 狭の附煙と信信として御迎へ来り。と云ふ。又烽火を傳へ又勝須  
 賀稻田。尾川は長に吉山朝野竹中が如き英勇と今度善徳寺の思  
 傳(遠)うは進み。馳集り。美濃及んで。鉄騎又余々雲霞の懸  
 とるに。信長朝臣善徳院より入る。後寺院の四方は雅の地  
 砂子す。槍無本無。焼つけ。怒りと陣列。疾に入て馳集る軍  
 勢。赤松松尾辺に。相つ。安濃寺。兵守。破れ。丁建が軍。く。大和  
 と。破れ。名と。来り。安濃寺。勢を。搦。十丁。許進。と。通。と。傳。り。い。出。善  
 徳院の地方にあたり。月為。圍。き。降。ひ。て。無。の。火。光。連。絡。と。駭。し。板。こ。そ

敵源と云ゆれ。煙しく進み。其間。は。竹。候。左。進。く。と。馳。集。り。降。は  
 信長が。宿。陣。の。近。邊。諸。軍。す。地。も。透。不。ろ。く。先。懐。す。と。云。ふ。諸。將。大。は。歎  
 息。遠。坂。の。言。圖。は。出。ま。る。と。云。ふ。引。揚。ま。と。言。ひ。未。終。く。と。う。小。後。の。林。は  
 忽。然。と。内。喊。起。り。勢。は。あ。ら。ま。次。一。人。の。大。馬。を。出。し。只。今。押。し。也。の  
 何。者。ぞ。名。の。と。ば。ん。斯。中。の。信。長。が。家。臣。本。下。及。吉。郎。と。云。ふ。を。録。し。勢  
 勢。う。後。丹。波。の。六。角。浦。生。の。あ。家。河。人。殺。ら。る。き。を。伺。ひ。何。なる。變。を  
 の。曲。者。馬。を。と。り。め。る。怒。り。と。い。ひ。後。丹。波。の。家。臣。安。濃。寺。兵。守。丁。建。善。徳  
 院。の。計。を。く。余。は。さ。ぐ。善。徳。院。を。守。護。し。中。世。と。長。政。の。命。は。い。く。  
 遠。坂。の。言。圖。は。出。ま。る。と。云。ふ。本。下。及。吉。郎。を。返。し。兼。て。其。後。も。計。の。あ。く。  
 諸。方。の。軍。勢。と。集。め。急。う。ろ。く。傳。へ。備。州。若。尾。の。御。方。志。信。長。通  
 じ。今。引。退。り。と。怒。怒。と。や。れ。と。後。丹。波。の。人。々。向。し。げ。い。い。見



清王尼力篇第五

十九



丁波運軍の  
夜中  
信長と  
龍虎人と  
の  
図

清王尼力篇第五

十九

しうた本や心中と刃透さんどくくと引返し見送るうろろた

翻義旗信長殊途後條

斯て小田家より諸方の軍勢を借使せらるるよるの武勇といひ是利  
再真の名義にきより尾張三遠の勢招き小聚り日九月七日兵渡  
國岐阜の城を雷後日八日仇和山に兵移り兼て後井徳守家  
出谷守徳守の病を死すに付仇和山に兵移り兼て後井徳守家  
好月屋已親善寺の本城は楯籠其餘の城は其他和山鏡森山  
石部給に芝津など海道仙道十八ヶ石の城は鷹下諸族は已  
大おと副籠屋浦生下野入る日中城は蝶合せ兵渡勢と寒と  
隊ふされ大敵を死し小敵を暇ざる名を以て本下後吉郎  
明智十玄湯が法は但せ左右の先鋒と為し本下和山は攻め入  
秋はる城を屠り城守と後継させ明智と一日の向

其他の城を奪はる吉田出雲守幸山は道と相持の大建部源八が  
前と捷しのを献ぐし信長朝臣は不斜死す本下は武勇  
高船比三郎は方比義秀のと名を以て以来秀吉とせよ  
と戲するいふ新軍の諱の字を思ひ義の字を去るいふ  
秀吉と稱するや日十二日本下明智一とあり親善寺の城と攻  
りて六角義真防戦する中城は命一ツを中乞城を捨て道と柴  
田勝家の所持の城を攻後浦生入る降旗を立く味方より  
は洲の城は風の雲を吹くごとく日廿日信長朝臣三井寺に  
あしう其勢十万余誘ふを安へるけう帝都は震動三股下地  
もみ然るに是に恐懼しはし旗を赤白を見れば斯てい京都  
に安堵めがごとく阿波の所守守備本國は趣中より日二十八日  
新軍と守備信長帝都に入給ひ義昭は此御座を清水寺と





日國公侯の地を城を築き地名を長濱と改めて爰より並に州一國  
 の國勢悉く委の吾に任せらる。是亦下家海内之威と震誇る。居之  
 永祿十一年新將軍家河上洛の戦い。是亦本國寺の戦ひ。其餘朝  
 倉津代のもも。諸書に詳かりき。を以て畧せり。

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 日國公侯, 地名, 長濱, 改めて, 爰より, 並に, 州一國, 國勢, 委の, 吾に, 任せらる, 是亦, 下家, 海内, 之威, と震誇る, 居之, 永祿, 十一年, 新將軍, 家河上, 洛の, 戦い, 是亦, 本國, 寺の, 戦ひ, 其餘, 朝倉, 津代, のも, 諸書, に詳, かりき, を以て, 畧せり)

